

～ヨーロッパ歴史芸術散歩～ 第 3 弾 ウィーンのカフェ文化 ～コーヒーとケーキが織りなす帝都の輝き～

7月6日(日)午後 1 時半～3 時半
講師：小宮正安氏(横浜国立大学准教授)



～ヨーロッパ歴史芸術散歩～の第 3 弾です。一昨年の「ビールとワインで見るヨーロッパの謎」、昨年の「オペラハウスの謎」に続き鷺宮 3 丁目出身の小宮先生に講演していただきました。

ハプスブルク家の都ウィーンの世界と文化を、「カフェ」を切り口に話していただきました。76 人という多くの方が参加されました。

1) それはトルコからやってきた？

ウィーンで最もウィーンらしさを保っているものは、カフェだと言われています。ウィーンのカフェの特徴は BGM が流れていないことです。高い天井に話し声や新聞をめくる音、食器の音が響いているだけです。コーヒーは、1683 年オスマン帝国による第二次ウィーン包囲後に残された黒い豆を「コルシツキー」という商人がスープにしたもの、という伝説があります。

2) 市民の時代とコーヒー文化

コルシツキーの話は全くの伝説ですが、ウィーン包囲後トルコの脅威が去るとともに異国情緒へのあこがれが生じ、貴重品であるコーヒーとコーヒーを飲むカフェが誕生しました。フランスのポンパドール夫人の肖像画では、トルコ風の衣装を身に付けた夫人がチョコレートを飲んでいますが、チョコレートは媚薬、ドリンク剤とされていたためです。上流階級の人々はチョコレートを飲み、市民達はカフェに集まりコーヒーを飲む、という構図になりました。市民というのは「街に住んでいる手工業者や商人」です。コーヒーを飲むと、頭がさえ理性的に商談ができるという効果があり、また貴族支配に反発した市民の時代を作ろう、という未来を語る場になりました。モーツァ

+ルト作曲の「トルコ行進曲」は実は「トルコ風」なんです。太鼓とトライアングルとシンバルとピッコロを入れるとトルコ風音楽になるんです。

3) ハプスブルク家と菓子文化

ウィーンのカフェにはお菓子がつきものです。ハプスブルクは大変大きな帝国だったので色々な人々がウィーンにやってきてお菓子の文化が盛んになり、やがて文化のミックスが起きて発展しました。1789 年フランス革命が起き市民が王権をひっくり返しましたが、ルイ 16 世という共通の敵を失い互いをつぶし合う凄惨な時代になりました。フランスの政治経済は崩壊し、市民達が誰かに国を任せたいと思い始めた時、ナポレオンが登場しました。彼はフランス革命の「自由・平等・博愛」の精神を他の国に教える、ということで周りの国に侵攻しました。ナポレオンの失脚後開かれたのが、「会議は踊る、されど進まず」で有名なウィーン会議です。毎晩晩さん会が開かれ、お菓子文化も発達していきました。シェフの一人フランツ・ザッハが貴重品の砂糖とチョコレートをふんだんに使って作った権力の象徴のお菓子がザッハトルテです。コーヒーを飲むことを主体にしている店をカフェハウスと言い、伝統的で客は大体男性です。女性向けにお菓子屋さんが経営した店をカフェコンディトライと言い、王宮御用達のデーメルなどが有名です。ザッハは「本家ザッハトルテ」、デーメルは「元祖ザッハトルテ」と言われています。これは「高級ホテル」vs「王室御用達」とも言えます。

4) カフェが作ったウィーン

1873 年ウィーンでは都市大改造とともに万国博覧会が開かれ、好景気の時代でした。その後経済が崩壊し、住宅難に陥った中で広まったのが、カフェです。カフェというのは公共の場で、お金さえ払えば何時間でもいられます。ザッハやデーメルは高級カフェですが、普通の人でも行かれるカフェがたくさん登場し、ここに集まってきたのはあまりお金のない人たち、学生、フリーの文学者や芸術家でした。コーヒー一杯で議論したり情報交換し合ったりしていました。そんな店の一つカフェセントラルには多くの作家や建築家・画家などが集まって新しい文化を作っていました。最後



に、カフェ文化の中から生まれた、宝塚を彷彿させるようなリヒャルト・シュトラウスのオペラ「薔薇の騎士」を聴いていただきます。このようにカフェは情報発信の場であり社交の場となりました。皆さまウィーンにいらした時などには、今回の話を思い出していただければ幸いです。